多言語と学びの環境デザイン

「Espace langues」：planning et réalisation

倉館 健一

KURADATE Kenichi
Université des études internationales Kanda
kuradate-k@kanda.kuis.ac.jp

身につけたい外国語にどっぷり浸かる学びの空間。学生の頃、そんな夢をみて
いた。街や大学、語学学校にもそのような場のないのが不満だった。キャンパスに
は留学生もいるだろうに、交流がないのが不思議だった。誰も聞いていないような
語学の授業にも不満で仕方なかった。そんな謎や不満を抱えながら教師になり、
年月が経ち、なるほどこういう事情だったかと理解したことも少なくない。しかし
同時に、どうやらこうした空間が実現できるらしいこともわかった。実際に縁
あって、これまで SFC ではマルチメディア・マルチリンガル・スペース (MMLS)
に、慶應日吉キャンパスでは日吉コミュニケーション・ラウンジ (HCL) 及びプル
リリンガル・ラウンジの立派な立上げに関わってきた。教え子にはこうした空
間で活動を展開する団体を立ち上げたものも少なくない。また現在、神田外語大学
では多言語コミュニケーションセンター (MULC) の活動に携わっている。

このような学びの空間は、コンテンツスペースとして発展を遂げてきた Web との親
和性も高いため、スマートフォンを取り、デジタルなどと気付く必要はまったくなくなった。

最高の学習材は辺りを見回せばいくらでも転がっている。なぜ今なお教科書や授業
だけが発想の中心なのかと不思議である。一方、教科書にとどまらず、関係性を
豊かに、そして学びを主体的に、単に教師次第だと思われる。なにかが障害になっ
ているとしたら、それを解消する手助けができればと思う。

1. 外国語教育とリソースセンターの歩み — テクノロジーとモードの変化

外国語教育のリソースセンター化は今に始まるものではない。戦前の事実は詳ら
かでないが、ここでは戦後の復興と教育の民主化事業の一環として国の補助金によ
り施設が整備され、視聴覚教育の普及とともに開始されたものです。慶應義塾
大学語学視聴覚教育研究室を例にとると、1963 年設立（戦前の校舎の迷彩塗装の
除去はその 5 年前の 1958 年）。ここで講義されたのはラジオ・映画・動画の管理、教材
制作、語学視聴覚教育法の理論及び実際の研究、調査研究、発表、出版、講座設置
など、語学教育に関連した事項の集中化である。その後、高度経済成長とともにテ
クノロジーは飛躍的に進歩し、ラジオからカセットオーディオ、テレビ、ビデオの
登場など、外国語教育はこれらと密接な関係を保ちながら発展を遂げていく。

また時代は前後するが、1970 年代にコミュニティ・アプローチが登場し、
文法問題法やオーディオリノンガルメソッドに一定の批判が加えられていく。日本で
の受容には温度差はあったが、とりわけ 90 年代以降に大学でも徐々に普及が進ん
Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

2. 大学図書・ネットワーク化・多言語センター — メディアとリソース

このように外国語教育/学習材の集中化には、すでに半世紀に及ぶ歴史がある。ところでのキャンパス内には、また、大学図書館が立っている。ここでは多言語の学習材や資料がこれらのリソースと関連付けられることが多い。一般に日本北進分類法（NDC）にありで、しかし外国語学習の視点では極めて理不尽としか言いようのない状態で、さらにしばしば重複して所蔵されている状況がある。こうした大学図書館のレファレンスサービスの開始は後、アメリカ式をモデルに慶應とICUでスタート。東大を経由して日本の大学図書館に形式的に定着していた。しかし「教育そのものと図書館との関わりが非常に弱かった」(竹内)。ハーバード大学図書館を理想として、「授業のために必要な資料を指定書として図書館に置いて、学生に学習させる」ということを試みるが、「授業そのもののスタイルが変わらない中で図書館だけを変えることも、やはりうまくいかない」。

この状況は90年代以降大きな転機を迎えることとなる。かつて図書館では目録化作業が中心的な業務であった(いわゆる「ランゲージセンター」に通じる)。この問題がネットワーク化によって解決され、レファレンスの充実によりさらにサービスが向上してきた(安達)。同時に多言語処理は、ニューバーサル化の進展により、現時点で既にデータベース処理上の問題にはほぼ解決の見通しが立ており、いまやヒューマンレベルの問題を残すばかりと言ってよく、管理組織の専門化と職業能力向上、そして文化多様化の問題解決が問われる段階に移行している。

ところで、この活版印刷誕生以来の「情報爆発」の転機にあって、「新しい図書館のビジョンと、大学教育改革のビジョンがどこかで接点を持つような構図で、大学の新しいあり方を考えるべき」(吉見 2011)であることは疑いない。個の知の力を強くするために大学があり、図書館があり、そして出版があるという「メディアとしての大学」という考え方がまさに情報化を強める時代に入ったと言われる。

その際に問われるのは、「教員とメディア」のつながり方の問題である。情報の「種」(=リソース)を拾い、もう一度教室に戻ってくるそのサイクルを大学でどうデザインするか。大学の将来構想は、学部や部局の壁があり、教育は教育、図書は図書という形に別れてしまいがちである。それぞれに自立性があり、大学全体のレベルで統合することは容易ではない。いずれも根は一つのはずだが、知を創造する基盤のあり方が、約500年ぶりに転回を遂げつつある事態である。このような移行期にあっては、教育と学びの変化を掘り下げ、関係するあらゆる立場を媒介してついでいく存在が是非とも必要である。情報化時代、情報量があるのは大前提だ。
3. 「場」のリソースと教育 — 教育のグローバル化・Web・コモンズ・協同

情報がオーバーフローする時代、かつての教養主義の伝統に則り、この本を読みたいとか、あのコンテンツを使いたいといった指示や教示だけでは有効性を欠く。そこには教師本来の役割があるとともに、学生同士が自発的に学ぶ環境も欠かせない。学習者同士のインタラクションを創出し、教師も教室だけでなく、多様な機会を設けて学習者の「視点を育成する」ことが必要である。多文化・多言語の学びの空間「Espace Langues」はまさにそういった役割を最大限果たすポテンシャルを備えた「場」となるだろう。もちろんこうしたコモンズは図書館の機能として求められるものとは限らない。ラウンジカフェのような場があればそれともいいだろうし、講師室がそのように機能する場合もあるだろう（SFCの在我は、各言語セクションの講師室を兼ねるが、図らずも）このような形で実現している。白百合女子大学なども同様）どこに置くかは教育開発ごとの選択の問題ではない。

時に教育のグローバル化が取り組まれる昨今、留学生の存在は大きい。学びの<人性のリソース>としての関与は当然であろう。また帰国生を含め、学生たちの言語プロフィールの多様化は進んでいる。多様に捉えるべき学生たちを「教室」に閉じ込め一斉授業を行うスタイルでは、もはや「学び」のデザインを最適化することは困難な時代に入った。「自分＝日本人／フランス語母語者／は＝？＞＜学生＝日本人＞＜グループ＞に＜初習者＞＝＜フランス語＞を＜授業時間＞に＜教える＞＜教室＞で＜教える＞＜学習＞＜教師＞である」といった職業意識だけでは、もはや教育は破綻するしかなく、また不快の道を進めるしかない。状況にによって絶えず変化する関係性から動的に学びの起動を促す柔軟性はもとより、創造性を核とした教育実践力、情報を吟味する力を養う指導法、明確な市民意識、「学びの主体性」に委ねるべきもののないものを数ばしとプログラム化していく専門性の構築、インフラ整備への貢献などがこの「場」に参画するカギとなるだろう。

またオンライン学習は、外国語教育/学習においてもすでに一般化しており、Moodle等のLMSやソーシャルネットワークを利用した学習も急速に進んでいる。このようなWeb上の学びの空間は、上記のコモンズとパラレルに発展を遂げており、ともに親和性が高い。英語は最も盛れているが、その他の外国語の学習においてこそ、インターネットのもたらした恩恵は多大であり、最高の学習材になる情報、通信相手や交流の場などは、少し意志を持って辺りを見回せば見出しそう時代に入ったといえる。もはやパッケージ化した教科書や授業だけが発想の中心ではなく、今改めて、これらの発想の前提として学習者の自身の学びの主体性が位置づけられるべきである。そこには教師の側の跳躍が必要である。
4. 教示なき学習の普遍性と有効性 — 学校文化批判とコンピテンシー

ところで、こうした一連のモノス成長の背景には、無職を深めた大学と社会との対話メディアの必要性がある。保護者や学生たちから寄せられる、企業や社会が求める社会力形成の要請とのギャップ、学校文化への不満や先々の不安などにそれぞれが向き合う場でもある。これまで自明とされていた「教師-学生」の関係も変容が促されるとともに、教師の無験性も過去のものとなった。多元的な価値を前提とする展望にあって「学び」に欠かせないのは、自分の将来を直接間接に投射できる人たちの、身近に接する現実に生きられた断片的な情報である。「今取収方法される能力—コンピテンシー」とは、社会/学校での評価以前に、「学び」という、人間が生まれながらに持つ尊厳としての知性が平等なもの、つまり多様なものとしてあり、これを前提とする自己への信頼を源泉とした「知の解放」である。

職業的都合から、この回路を開くどころか閉ざしてしまう構造が学校文化には根深い（レイヴェンベルク、ランシェール）。一度「学校」を離れれば、人から人への直接教示や言語を使った明瞭な教示はむしろ例外的だ。「教えることができなければ効果的に知識を身につけることはできない」という現代的社会的共通認識は、「伝統的学習観」といえるものではない。実のところ、これは決して古くから社会に根付いたものではなく、現在の学校をモデルにして成り立っているものにすぎない。

もちろん、学術研究の枠として、大学がその知識の伝達の機能を果たすことはその重要な存在意義である。また確かに確固たる自己と自己信頼を形成する上では、読書と産出の反復活動を伴う従来型の講義形態の方が適しているに違いはない。しかしながら、あらゆる「知」が矛盾的、社会構成主義的に捉えられていくなかで、教育の現場では関係性を豊かにして、創発を生む場をつくることが是非とも必要だ。価値の多様化する時代にあって、自文化や情報メディアを相対化し駆使する能力が不可欠であり、絶対的な教師像ばかりでは学生の健全な自己形成を促進する結果となってしまう（もちろん反面教師がいるのも悪くないだろうが）、方向性や対立ばかりでなく、関係性を豊かにして学びを主体的に、個を強くするとともに、情報に応じて個を崩せる柔軟性、教育現場での社会性の変化はもはや不可逆である。

5. まとめ：「Espace Langues」—— 複数言語の学習とコストと現実的展望

オープンフローする情報化の時代にあって、生涯学習や綺麗なという具合に教育もまた限界なく拡大している。もはや教育システムの破綻と終焉がまことしやかに語られる時代である。複数言語の学習もまた、「情報の過剰」や「コスト過多」として切り捨てられる運命だろうか。そもそも第二言語習得(SLA)の知見に照らし、大学課程の初学生者の科目の数を満たすにはほとんどのことは周知の事実である。ならば大学はもはやポピュリズムにおちま、英語帝国主義に染まりきるべきだろうか。なつらは一体どのような未来像に与するべきであろうか。

ところで「Espace Langues」の運営でまず直面する現実は、利用率の低迷である。以上の議論を通じて明白するが、これはなんら奇に値しない一過性の現象である。手当の仕方はいくらでもある。「メディアとしての大学」の再定義が進み、学びのモード変化に立ち会うこの時季、「授業」「教室」「キャンパス」「教師」「学生」、「履修」、「専攻」といった諸概念がどれもも旧来のモードを脱し切れていない。我々教師は言語にまつわる教育や学びの諸課題を掘り下げ、これらの「滞
リ」を除いていき、学生たち自身にこそその「場」を委ね、切り拓いていくであろう。展望はむしろ明るいはずだ。神田外語大学 MULC に携わる教授たちの思いはここに一致している。そして観察するのは下記のような変化である。学生たちが学び教え合えること、この場では学生たちが明るく輝いていること、「学力」と「能力」の違いがはっきりと観えること、教師への直接の質問が劇的に減ったこと、学び方の学習への新たなアプローチが感じられること、など。

Espace Langues はスモールワールドであり、学生にとっては物理的な世界知のイメージとなる。すべての夢や希望や情報はここに凝縮されており、ここからすべてにつながっている。情報革命は現在、上述した知の解放を劇的に進展させている。多様性と変容の流れの中で、大学という場に位置する Espace Langues は、この「知の解放」の先端を担っていると言っていいだろう。この視点の意識化が問われている。しかしながら「複数性」とは、質・量・スピード・バランスともに途方もないタフで、不確定な知的冒険である。その理念を明確にし、未来を見定めた上で、今できることを今やるべきである。最後に、Espace Langues には、斯くのごとき希望へのみちを推し進めるにあたり、この試みをより「開かれた」かたちで確認していく社会的使命がある。敢えてその事実を強調しておきたいと思う。

＜参考文献・URL＞
倉田健一, 濱野英之(2008).「外国語学習/教員のリソースとは」,『外国語教育研究』, vol.28, 論叡大学.
倉田健一, 五十嵐美樹・三橋純(2011)。「教育の国際化と在住市民の言語学習環境の創出」, Revue japonaise de didactique du francais, vol.6, t.1, 日本フランス語教育学会。
慶應義塾短期大学編(1968)。「慶應義塾百年史・下巻」, 慶應義塾。
藤田知子(2011-2012)。「多言語コミュニケーションセンター・事前設計」, 『研究』, vol.2, 神田外語大学。
吉見俊英(2011)。「大学とは何か」, 早稲田大学。
吉見俊英・安達淳・竹内比呂也・羽田功・田村修作(2012)。「メディアの変化の中で大学図書館はどこへ向かうか」, 『三田評論』, 2012 年 6 月号 (特集・大学図書館のこれから)。
ラムシール, J. (2011)。「流知の教師—知性の解放について」, 法政大学出版局。
レイヴ, J. & ウェンガー, E. (1993)。「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」, 産業図書。
神田外語大学多言語コミュニケーションセンター (MULC) / セルフアクセス・ラーニングセンター (SALC) (http://www.kandagaito.ac.jp/kois/seven/mulc.html)
あるいは (http://elisalac.org)
慶應義塾大学日吉キャンパス 日吉コミュニケーション・ラウンジ (http://www.hc.keio.ac.jp/ja/facilities/campuslife/hcl.html)
慶應義塾大学 PLURILINGUAL Lounge Organization (PLURIO) (http://plurio.hotcom-web.com/wordpress/
「留学生と商店街 学生が活ける日吉」(日本経済新聞 2012 年 8 月 6 日付(載平気))
http://www.nikkei.com/article/DSGXI20044588285V00C12A8TCP000/
慶應義塾大学大学間メディアセンター マルチメディア・マルチリンガル・スペース (MMLS) (http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/general/room_2.html)
慶應義塾大学大学間メディアセンター マルチメディアセンターの日程 (http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/about/friends_proposals.html)